# 木の実幼稚園の保育の４つの特徴

## １、　コーナー保育

園児がその日の遊びを選んで遊ぶことができる。教師は幼児が興味を持てる遊びを用意し、子ども達に経験させたいこと身につけさせたいことなどをその遊びに取り入れていく。必ず教師の願いがそこに反映されなければならない。

そこに行けば自分の好きな遊びができ、必要な道具や材料がそろっていて、いちいち教師に聞かなくても自由に使うことができる環境を整えておく。

| |
|---|
| 子どもの中に育つもの：主体性　考える力　協同性　工夫する力　考える力　創造 |

## ２、　縦割り保育

異年齢が生活の中心。年長児、年中児、年少児のクラス
２歳児　１歳児のクラス　　がある

・年長児は最高学年として自信を持ち、年下の子ども達の面倒をよく見てくれる。お当番活動を通して責任感を持って積極的に自分の仕事をする。

・年中児、年少児は年長児の姿を見て年長児に対して憧れの気持ちを持ち、自分もより良くなろうという気持ちを持つ。

| |
|---|
| 子どもの中に育つもの：やさしさ　　大きくなることへの期待感　　憧れ |

## ３、　森の幼稚園

遊びの森キャンプ場で「森の幼稚園」

毎月２回、登園してすぐに遊びの森キャンプ場へ全員で出かけ、森で１日過ごして遊ぶ。森の中では様々な自然と触れ合うことができる。

手作り遊具で色々な遊びに挑戦したり、色々な虫を見つけて捕まえたり、木に登ったり、草花や木の葉、木の枝を使って見立て遊びをしたり、沢ではサワガニを見つけたり、季節の木の実を取って食べたり、色々な遊びを創り出したり、探検に行ったり、森の中では自分で考えれば遊ぶことはいくらでもある。危険なこともあるけれど、子ども達は恐れずに挑戦することで危険に対する、認知能力や防御するための体の動きなどを自然に覚えていく。

| |
|---|
| 子ども中に育つもの：考える力（思考力・創造力・知恵）　我慢する力（忍耐力）<br>工夫する力（想像力）　やってみたいという意欲　挑戦する力　感じる心（感性） |

## ４、　キリスト教保育

毎日行なわれる礼拝の中で、静かにイスに座って話しを聞く態度。怒鳴らずにきれいな声で歌を歌って常に神様から守られているという喜びを感じることでいつも感謝の気持ちを持つことの大切さを知る。一定時間イスに座ってお話を聞くことの大切さを知る。子ども達は神様、イエス様が大好きになり、誰も見ていなくてもいつも神様が見ていてくださるということを覚え、分け隔てなく人に関わり、正しい行動ができるようになる。

子どもの中に育つもの

感謝する心　人への信頼感　　見えないものへの畏れ　　思いやりの心　　やさしさ

などなど、色々なことが子ども達の中に育っていきます。

行事に対しての考え

　木の実幼稚園では見せるための行事は行なっていません。子ども達は行事を楽しんでやることで面白いと感じ、面白いと思うことでもっとやってみたい。面白いから皆でやってみたいと主体的に思えるようになってきます。

　もちろん我慢したり、頑張らなければならないこと、協力をしなければならないこともたくさんあります。我慢することも頑張ることも、お互いに協力することも、自分が面白いと思えればできることなのです。社会へ出るための一歩です。なるべく子ども達自らがやってみたいと思えるような環境つくりからはじめます。

自由に対しての考え

　木の実幼稚園にはたくさん自由があります。遊びを選ぶ自由、考える自由、などなど、でも自由の意味とは、ある一定の規範意識の中で自分で考えて行動すること。とあります。自由だからといって人に対して迷惑をかけることや、遊んだら、「やりっぱなし」ではいけないのです。それは「自分勝手」といって自由とは違います。だから木の実の子ども達はだんだんと、自由の中には責任があり、人に迷惑をかけてはいけないことを覚えていくのです。

幼い頃から指導（訓練）するということの弊害（早期教育の弊害）

　昔から「2 歳からでは遅すぎる」という言葉があります。いわゆる早期教育の話を耳にして、「うちの子は何もしなくて大丈夫かしら……」と心配する保護者のかたは多いかもしれません。読み書きや計算、英語といった知的教育の成果は目に見えやすく周囲と比較しやすいだけに、保護者として敏感になりやすいものです。

　しかし、幼児期にどれくらい知的教育に力を入れるべきか、私たちはもっと深く考える必要があります。というのも、近年の研究では、幼児期の知的教育による効果は一時的に過ぎず、長続きしないことが明らかになりつつあるからです。最初は他の子どもを大きくリードしますが、小学校に入学して学年が上がるにつれて差が見られなくなることがわかっています。

小さい頃から大人の指導の下、色々なことをやらせると小学校へ行ってから楽になるという考えがありますが、実は正反対なのです。

幼い頃に自分の好きな遊びを十分にすることにより色々なことに対して興味関心を持つことができるのです。大人の指導の下ではなく子どもの意思で「やってみたい」と思って行動することによりこのような気持ちを持つことができるのです。

それを非認知能力といいます。

　非認知能力とは具体的にはどのような力や姿勢を指すのでしょうか。ひと言で表すのは難しく、例えば、次のようなものが含まれています。

◎目標を達成するための「忍耐力」「自己抑制」「目標への情熱」
◎他者と協力するための「社会性」「敬意」「思いやり」
◎情動を抑制するための「自尊心」「楽観性」「自信」

いずれも大切な力や姿勢だと思われるのではないでしょうか。

非認知能力は具体的にどう働くのか、一例として算数の問題の解き方を学習する場面を想定してみましょう。

算数の問題を解くためには、授業の内容を理解したり、公式を暗記したりといった「認知能力」が求められます。しかし、それだけでは不十分で、理解できるまで根気強く勉強を続けたり、友だちと教え合って理解を深めたりといった非認知能力の支えが必要です。学年が上がって努力や工夫が求められるようになるにつれて、非認知能力の支えがなければ主体的に学び続けることができず、伸び悩んでしまう可能性は高まるでしょう。

それでは、幼児期の教育にはあまり意味がなく、ただ遊んでいればよいかというと、答えはノーです。幼児期は、小学校以降の学力の土台となる「非認知能力」と呼ばれる力や姿勢を十分に育てるべきだ、そんな研究成果が世界的に注目されています。幼児期に非認知能力を伸ばすことで、学歴や仕事など将来の成功に結び付きやすいということがわかってきたのです。

実は、欧米などの先進的な園では、知的教育ではなく、非認知能力を伸ばす教育へと重点をシフトさせているのが世界的な潮流です。早期教育に力を注ぐ日本の状況は、国際的には逆行していると言えるかもしれません。

子どもにとってはそれが遊びが大切です。自分の好きな遊びにじっくりと取り組み、時には失敗し、思うようにできなかったり、試行錯誤しながら遊ぶ事が大切なのです。

大人は子どもの「できない」気持ちを受け入れ、時には見守り、時には励ましたり、時にはアドバイスしたり、できた時には思い切り褒めてあげるなどのかかわりが大切なのです。

そんな関わりができるといいですね。

園長